

26 「ウソ」を本当にする方法とアンテナがキャッチしたもの

スポーツはシナリオ（筋書き）のないドラマといわれます。まさに真剣勝負の行方が分からないところがスポーツ観戦の醍醐味なわけですが、音楽にしたって、ライブの臨場感がたまらないという人も多いと思います。ところが、ビートルズのようにレコード製作の場でいろいろなアイデアを試したい、ライブで再現できないアレンジを行いたいと考えてライブから撤退したバンドもあります。XTCもその一つ。リーダーのアンディ・パートリッジは「誰も小説家に目の前でタイプライターを叩いてもらおうとは思わない」と言いライブ活動を辞め、それまで以上に良質なアルバムを数多く発表しました。

かく言う私もビートルズやXTCのアルバムは大好きですし、「シナリオのある」ドラマも大好きです。シナリオがあるということはフィクション（作り物）なわけですが、観客はもちろん手に汗を握り、固唾を呑みまくり、食い入るように画面に魅入りたいわけですが、そのためには作り手の工夫が必要なわけで、作り物を本物に見せるためには、どこかにホントウの部分を入れて、それがウソの部分を覆えばいいわけですが。例えば、原田芳雄主演の「浪人街」（1989年公開）は、4人の浪人が120人の悪党旗本と戦うというナンセンスなストーリー。にも関わらずリアリティを持ち込めたのは、敵が待ち構える森に向かう場面で、主人公が1本の刀を持った上にわきに5本の刀を差し、数本の刀を体中にくくりつけたところにあっと思ったと思います。日本刀は2～3人も斬れば、血のりで使い物にならなくなるという説もあり、テレビの時代劇のように1本の刀でバッサバッサと悪人を退治するのはリアリティに欠けるわけです。そこで、何本もの刀で敵に立ち向かわせることで、ラストの大立ち回りがリアリティあふれるものになったというわけです。

さて、ピリー・ワイルダー（2002年没の映画監督）がシナリオライターに与えた助言「答えは観客に出させること。そうすれば放っておいても観客の心を虜にできる」（2000年刊「ワイルダーならどうする？」より）は教育にも通じる教えだと思います。教育現場でスポーツ観戦やドラマのように子どもたちに熱をあげさせるには、教師や親にその手管（技術）がいるわけです。（もちろん刀を何本も持つわけにはいきませんので）

初任時に印象深かったのが「教師は『五者』であれ」という教え。「学者」として専門的な学力や知識を持つこと。「役者」として演じ、生徒を惹きつけること。「医者」として生徒の抱える悩みや問題点に気づき、解決の手助けをすること。「易者」として生徒の可能性を見抜き、将来の道を開いてあげること。「芸者」として、学ぶことに興味を持たせ、楽しくさせること。こういう教師になれたかということ心許ないですが、何十年もかかってようやく分かったことは、ワイルダーも言っていた「教えるより気づかせること」の大切さでした。五者の手管を用いて、生徒自らが気づくヒントを与えることが最も大切なわけですが、気づきの効果が高いことはスポーツ界でも実証されていますし、ドラマも説明が多過ぎるとスリリングでなくなります。もちろん気づかせる前提としては、子どもたちのアンテナが立っていないといけません。そうでないと、どんな良い教育活動を行ったとしても、アンテナは何もキャッチしません。アナログ人間の私でも、タブレットの活用がアンテナとしては大いに有効だと思っています。まあ私の場合は、映画やドラマ、音楽など学校で教わらないことばかりを、アンテナがキャッチしていたことは否めませんが。

令和6年5月1日 大村城南高等学校長 中小路尚也